

ティーチング・ポートフォリオ(教育業績ファイル)

教員氏名	森田 学
主な担当科目	音楽文化研究Ⅲ,作品研究特殊講義Ⅰ,博士外国語原典研究特講Ⅱ,博士研究指導
2024年の教育目標・授業に臨む姿勢	本年度の教育目標は、昨年度に引き続き学生の主体的な学びをいかに導くかである。学生の中には本学が第一志望だった学生もいれば、そうでない学生もいる。また音楽は好きだが勉強に強い抵抗を感じる学生もいる。高校までの習う授業から大学での学びの深さと豊かさを学生が理解し、行動できるように導きたい。授業では各科目で設定した到達目標にどのように向かうか、今どこにいるのかが把握できるような指導を目指す。
2024年の教育に関する自己評価	シラバスに示した内容を踏まえ各回の授業で学ぶことが目標到達までのどのステップにあたるのかを口頭でも説明し、授業内で実施する小テストではどこまで理解できていて、どこから理解できていないかをフォードバックした。通年科目での前期末と年度末の試験では、素点のみで学生の理解度を判断するのではなく、不正解であってもどのように解答したかのプロセスも見ることができる出題形式にすることで質的な評価も行った。この評価基準を示すことで学生の試験に向けた学修にも変化が見られた。次年度も学修効果により確実に繋がる評価について実践していく。
2024年のFD活動に関する自己評価	語学分科会、音楽学分科会、音楽教養分科会、基礎ゼミ分科会といった異なる複数の分科会に参加したことで、「多様な背景を持つ学生」について具体的なイメージを持つことができた。合同研修会のグループディスカッションや語学分科会では参加者が発言しやすい雰囲気を作ったり、授業をよりよいものにするための考え方や具体的な改善策を参加者全員で探る研修会に導くことに貢献できた。
授業改善のために取り入れた研修内容	授業にでていても実際にはうわの空だったり、スマートフォンが気になる学生に対して、タスクを個別要素に分けつつ指示を出した。例えば、「今から5分間で問題解決の前提となる非常に重要なことを解説する」「いまのルールを使って基本問題を10問、5分で解く」「基本問題で理解したパターンに、〇〇の要素を加え、応用力を養う問題を5問5分で行う」といった具体的な指示とそれによって養われる力を理解した学修に導いた。

2024 年度(後期)「学生による授業アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード:2924 教員名:森田 学

1)アンケート結果に対する所見

「オペラの歴史と作品」では、オペラの価値と楽しみ方を知り、その再現・創造にかかわるための基礎を作ること为目标としている。世界史や文化史、「西洋音楽史」の知識を前提として進む授業であるため、当該授業に興味をもって主体的に学修する学生にとっては有意義と感じられ、「少し思う」「あまり思わない」と回答した学生(63.6%)にとっては負荷を感じる科目だったことが、自由記述欄からも理解できる。「難しい・わかりにくい」と「妥協のない質の高い授業」という意見から、履修者が二極化している可能性も読み取れた。毎回の授業での出席は教員とTA による厳密な集計管理が徹底していることもあり、自分自身の出席を学生が把握している結果が得られたと考えている。

2)要望への対応・改善方策

授業時間は 90 分となるため、授業内ではオペラを(楽しく)鑑賞するのではなく、専門的な知識をもとに作品と向かい合う訓練として作品に触れる。当然、授業外学修において作品全体に触れる必要がある。この点についてはシラバスや授業内でも指導しているが、アンケート内容を見る限りにおいては複数回、場合によっては毎回の授業で説明することが必要かもしれない。前提となる知識がどこまでなのかを示すために毎回の授業でレジュメを配付していたが、この内容が「膨大な情報(覚えなければいけないこと)」と捉えた学生も少なからずいたため、さらなる理解のために必要となる内容、本来は前提となる内容、最低限知っておくべき内容(試験で問われる可能性のある内容)が視覚化され、学生自身が理解しながら、メモを取れるような進め方を検討したい。

声乐コースの学生(だけ)を対象にした授業であるかのような印象を与えたことは、オペラが「recitar cantando」の理念から生まれ、育まれてきたかを丁寧に説明する(音楽になぜ言葉があるのか)ことで改善していきたい。

3)今後の課題

近年のメディアコンテンツではショートムービーが主流となっており、オペラのように長時間集中して作品と向き合うことで立ち昇ってくるものをすくい取ることが「楽しみ方」のひとつとなるジャンルを、アカデミーの場でどのように学ばせるかが課題となるだろう。

以 上